

---

## ボストン留学体験記

小林 憲市 Massachusetts General Hospital

---

私は細胞科学研究財団より育成助成を頂き、米国マサチューセッツ州ボストン市にある Massachusetts General Hospital (MGH) で、2020年10月よりPostdoctoral Fellowとして留学しています。

もともとは2020年4月からの留学を予定していましたが、同年3月に出たアメリカの国家非常事態宣言を受け、MGHは全てのInternational Researcherの新規受入を停止し、断念せざるを得ませんでした。

VISAは既に入手できていたので、制限が緩和された9月に渡米することができましたが、この半年間を振り返ると、やはりあらゆる場面でCOVID-19の影響を受けた半年間だったと痛感します。

ボストンはアメリカ東海岸北部ニューイングランド地方最大の都市であり、歴史と流行、現代と古風が共存する街として、観光客にも人気の都市です。ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学 (MIT)、ボストン大学、タフツ大学など多くの大学や研究機関がある学都であると同時に、ボストン交響楽団や、ボストン美術館などの音楽・芸術の街としても、またアメリカ4大スポーツが揃うスポーツの街としても有名です。そして、COVID-19の影響を最も大きく受けた州の一つでもあります。

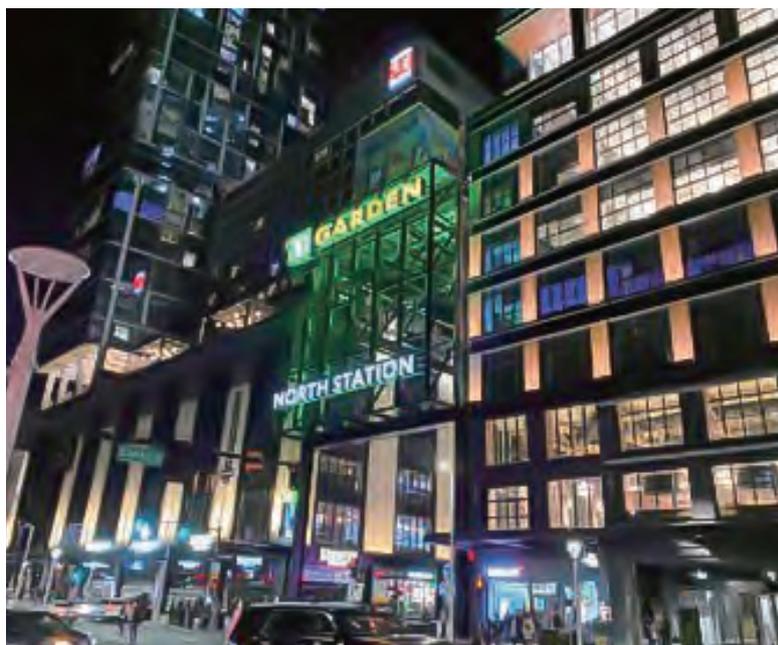
芸術・スポーツの多くはその活動を停止し、大学・研究機関も大半が一時的なロックダウンを強いられました。多くの方が雇用を失い、米国内でも屈指の物価の高さから家賃が払えない人が続出するという悲しいニュースが毎日聞かれました。公共交通機関で移動可能なコンパクトで便利な街も、ロックダウン時には狭い空間での生活を強要する街と変わり、多くの人の生活に影響したそうです。

「あと2週間緊急事態宣言が遅ければ渡米できたのに！」と苦虫を嘔んでいた時期もありましたが、こちらにきてから、渡米直後にロックダウンを経験された日本人の方にいかに大変だったかを聞くにつれ、却って渡米を延期してよかったと考えるようになりました。

私が渡米した9月にはSocial Distancingに関する厳密なルールを設定した上で大半の研究室が活動を再開していましたが、すぐに研究を行えるという状況ではありませんでした。

スペースあたりの使用人数のルールが厳格化され、当初予定していたスペースを利用することが出来なくなり、余裕のあるラボにスペースを間借りし、一から十まで研究のセットアップをしなければなりません。物流、製造、サービス、研究機関同士の交流、あらゆるものがCOVID-19の影響を受け、研究に関する資材の発注不可、配達遅延も日常茶飯事でした。一番致命的だったのが、渡米後半年間共焦点顕微鏡にアクセスできなかったことでした。感染拡大を防ぐために研究施設間の交流が厳密に制限され、以前に使用できていた顕微鏡が使用できなくなった上に、所属施設で購入した顕微鏡がやはりCOVID-19の影響で納品が3ヶ月近く遅延するという状況でした。なんとかその時々にはできることをやっていたのですが、思うように研究を進めることは難しい日々が続きました。

入国後に一番困ったのがあらゆる手続きがコロナ禍前とは全く変わっていたことです。システムが全く異なるため、日本人もアメリカ人の同僚も経験したことがない手続きが必要となりました。質問したくてもほぼ全てがオンラインで、メールの返事を待たなければならず、右往左往する日々が続きました。



(写真1) NBA ボストンセルティックスのホームコート TD ガーデン

また、COVID-19のロックダウンにより、学校の閉鎖も続いていたので、単身渡米となっていたことも精神的には辛いものでした。ボストンの越冬は非常に厳しいものでしたが、近所の方の温かい支援もあってかろうじて生き延びることができました。

暗い話ばかりになりましたが、春の訪れとともに、あらゆる面で少しずつ明るい兆しが見えています。

アメリカではワクチン接種がものすごい勢いで普及し、私自身も2月に接種することができました。接種者の増加に伴い、様々な制限が緩和され、ボストンでも4月からプロバスケットボールの観戦が可能になりました(写真1)。

私生活では家族が渡米しともに生活できるようになったことが一番大きな変化です。日本では休日あまり長い時間をともに過ごすことはありませんでしたが、こちらでは毎週のように家



(写真2) 近所の公園で家族とボルダリングを楽しむ。

族共通の趣味であるロッククライミングに出かけています。室内のロッククライミングだけでなく、自然のロッククライミングを楽しめるスポットが周辺にたくさんあり、楽しい時間が過ごせています（写真2）。

研究についてもやっと、集中して取り組むことができる環境が整いつつあります。前例のない世界的なCOVID-19の大流行という中、何度も留学のことを諦めそうになりました。

細胞科学研究財団の助成を受けることが出来ていなければとうの昔に留学そのものを諦めていたと思います。改めて感謝申し上げます。

最後に、このような貴重な留学の機会を与えていただいた滋賀医科大学泌尿器科学講座教授の河内明宏先生、本財団へのご推薦を頂いた大阪大学医学部名誉教授の北村幸彦先生に感謝申し上げます。末筆ながら細胞科学研究財団の益々のご発展をお祈り申し上げます。